

祝

2018年3月 法政大学博士号(公共政策学)取得

小西雅子さん(取得時59歳)

【論文テーマ】気候変動政策推進のための国際NGOとメディアの相互作用に関する研究 — WWF戦略的舞臺広報を中心として —

論文が私を、新しい世界に連れてってくれる可能性を感じています

■夢は必ず叶えてきた

子供の頃から夢を叶えてきた小西さん。アナウンサーにも、気象予報士にもなった。海外の大学院へ留学も、本の執筆も。そして博士号も……。

小西雅子さんは、WWFジャパンの自然保護室室次長兼気候変動・エネルギープロジェクトリーダーを務める。WWFは環境保全や自然と人間が共生するための研究、そして社会に向けた政策提言をする公益財団法人。パンダのマークで有名だ。

テレビ局でお天気キャスターをしていたとき、世界中で異常気象が増えていることに危機感を抱いた。温暖化を認識すると同時に、経済原理を活かして環境保全を追求する温室効果ガスの排出量取引制度を知り、その仕組みに強い感銘を受けた。そして、ハーバード大学の公共政策大学院に入学。排出量取引制度の権威のもとで修士号を取得。2005年に日本へ帰国した際、研究を活かせる人材募集をしていたのがWWFだった。WWFで研究やメディア対応をしていく中、博士号を取りたいという思いが強くなった。夢は必ず叶えたい。仕事と両立させ効率よく最短で取得することを目指し、2015年に法政大学大学院博士後期課程に入学した。

■経験を活かした独自性のあるテーマ

自分が得意で独自性のある博士論文とは。テレビというメディアでの経験。環境保全の最前線WWFでの経験。両方を合わせれば、自分だけの独自性が出せると思った。WWFで小西さんは、2008年から2015年のパリ協定まで、メディアの記者に

環境問題の情報提供やレクチャーをするプロジェクトを担当した。環境保全は、科学、地政学、経済学、政治学などが複雑に絡んでいるため、記者自身の取材だけで問題を理解するのは困難だからだ。

「日本のNGOや研究機関も含めて、成果をアピールするのに苦労しています。WWFで9年間やってきたような手法で、NGOと環境報道ジャーナリストが相互作用を及ぼすことにより、環境政策の推進に役立つというのがこの論文の結論です」

■暗黒の日々と自信喪失

独自性の一方で、自分の成果を自分で評価しても信憑性に欠けるといふ問題が残った。関連論文を英国のジャーナルに出した際、そこを鋭く突かれた。いかにして客観的な評価をするか。NGOの成果を国際交渉の文書から評価する手法を見つけて、やっ

と道が開けた。博士論文も大幅な修正を求められ、暗黒模索の日々が続いた。

「仕事以外はずっと論文と向き合い、効率。どころか、寝ても覚めても暗黒から抜け出せない辛さを味わいました。そんな中、指導教官の池田寛二先生が、天井から細い蜘蛛の糸を照らすように導いてくださいました。そして、論文の質を高めるだけでなく、日本の社会科学をより国際的に発信していく糸口にならなさいと励まされたのです」

結果的に最短の3年で取得したものの、追求しすぎるあまり自信喪失し、論文を読まれたくないままで落ち込んだ。しかし、高い評価とともに共同研究やセミナーの打診、共著で米国で本を出す話なども届き、やっとな笑顔が取り戻せたという。いまは「論文が自分で歩き始め、私を新しい世界に連れて行ってくれる可能性を感じています」と前向きだ。

■あなたに期待しているというメッセージ

「45歳でハーバードに行ったときは、どの奨学金も年齢の上限でだめでした。生涯学習開発財団を紹介してくれたのは、本事業で最初に博士号を取得した先輩の池上萬奈さんです。財団にとっても勇気づけられたという話を聞き、応募しました。この支援事業は『あなたに期待している』というメッセージと受け取りました。

私自身が苦しんだので、安易に博士号を目指せとは言えません。でも、人生の節目で迷っているなら、自分がやりたい分野で輝いている人を見つけ、勇気や元気をもらおうと良いと思います」



60歳前後で博士になった先輩2人の輝かしい後ろ姿にあこがれた。私も誰かにそう思ってもらえたらうれしい。